

悪霊祓い儀礼の考察（1）

—インドネシア・バリ島の悪霊祓い儀礼の事例から—

岩部俊美

（お茶の水女子大学大学院）

問題 共同体の儀礼、殊に治病儀礼や悪霊祓いの儀礼は、共同体における癒しを担う実践であり、そこには共同体と自己のあり方が端的に示されている。ここでは、インドネシア・バリ島の地域共同体における悪霊祓い儀礼を事例に、社会的実践としての儀礼がどのように行われ、維持されているか、そして、その中で、どのように共同体における自己が形成されているかについて考察する。

方法 インドネシア・バリ州の南平野部、州都のある県と隣県の県境付近にある農村の悪霊祓いの儀礼（サンギャン・ドゥダリ儀礼）を28回観察し、巫女の経験者を中心に関係者に面接した。調査期間：1998年4月～1999年1月。

結果と考察（1）儀礼の特徴：観察した儀礼の特徴として以下のことが上げられる。①悪霊祓いの儀礼である。儀礼は寺院で神がかりになった巫女が人々に聖水を与え、聖なる踊りを踊ることが中心となる。②託宣に従い、定期的（3年毎）かつ、長期間（7ヶ月から1、2年）にわたって、暦上の特定の日に行われる（週に2、3回以上）。③村で生まれ育った初潮前の少女（9～12才くらい）の中から、神が降臨した二人が巫女として選ばれる。④儀礼の期間、巫女には様々な禁忌が課され（外出が禁じられるため学校も長期欠席）、巫女経験者から儀礼の踊りを習う。⑤儀礼の期間、巫女は神の依り代として敬われる。すべての共同体の成員は巫女に最上の敬語を用い、（本名で呼ぶことは禁じられ）巫女としての名で呼ぶ。⑥共同体全体が参加する。各世帯の男女の代表、共同体の11ヶ寺の祭司たち、村長、巫女経験者、巫女の付き人、神輿の担ぎ手、歌い手、若年男女の歌の集団、楽団など、共同体の様々な人々や集団が多面的にかかわっている。子どもたちは、儀礼以外の時間も巫女の傍で過ごし、巫女の生活する寺院の境内に泊まる。

（2）式次第：儀礼は夜7時頃始まり深夜まで、以下のように進行する。①準備：巫女は水浴の後、冠に生花を飾付ける。②開始：半鐘の合図で人々が寺院に集まる。③神の降臨の儀式：祭司の祈り、女性集団の歌が始まる。巫女は

祠の前に跪き、白檀や安息香が焚かれた香炉に屈み込む。巫女は香と歌に導かれ神がかりになる。歌のメロディに合わせて巫女の身体が左右に大きく揺れ始めることが、神の降臨として人々に了解される。その後、巫女は目を閉じたまま、無言で様々な儀礼的所作を行う。④村人の祈願：数組の家族が巫女の前で、病気快癒、家庭での儀式的無事を願って祈り、巫女から聖水と巫女の冠の花を貰い受ける。⑤行列：巫女を乗せた神輿に従い、参加者全員が歌いながら、村中を行列する。辻々や村の境界で立ち止まり、巫女が祈り、神輿の上から聖水を撒く。⑥踊り：寺院の境内に戻り、巫女は歌や音楽に合わせて聖なる踊りを踊る。その後、巫女は境内にいる人々に聖水を与える。⑦神を送り出す儀式：冠を取り、③の儀式同様、巫女は香と歌に導かれて、神がかりから覚める。巫女が冠の下に着けた頭巾を取ると、意識を取り戻したとして人々に了解される。⑧巫女は冠から取った花を人々に配る。（3）結び：以上のことから、悪霊祓い儀礼のための、構造化された「実践の共同体」（Lave & Wenger, 1991; Wenger, 1998）の存在が示唆される。そして、その存在そのものが、共同体を外的、内的な脅威から守るものとなっていると考えられる。また、悪霊祓い儀礼における社会的実践は、意味付けられた時間（暦）と空間（村落空間、寺院）の枠の中で、神がかりになり目を閉じた巫女を中心とする参加者の様々な身体の所作を通じて見えざる世界を、視覚化することにかかわっている。巫女は、共同体の一員であると同時に、初潮前であること、禁忌を課されることにおいて、聖性を付与され、共同体と見えざる世界との媒介者となっている。見えざる世界を通して、「私」は共同体と切り離されておらず、また、「私」のまなざしは共同体そのもののまなざしに重ねられている。このような共同体における自己のあり方が、実践の中で学び取られているゆえ、個人の病や苦は共同体のものとなり、共同体において癒されることができると考えられる。